

国語史資料としての近松世話物浄瑠璃：濁点・胡麻点等の表記について

野口，義廣
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/12107>

出版情報：語文研究. 43, pp.32-43, 1977-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



国語史資料としての近松世話物浄瑠璃

濁点・胡麻点等の表記について

野 口 義 廣

はじめに

従来、国語史資料としての近松世話物浄瑠璃の扱いは、語彙語法等を中心とした近世上方語の研究に使用されるというのがもっぱらであった。最近出された「国語史資料集」^(注1)においてもその方針は変わっていないようである。

いうまでもなく、浄瑠璃という「語り物」は丸本として刊行された。^(注2)そして、それには節章・胡麻点・濁点等が付されている。

しかしながら、それらについては、今迄十分注意されてきたとは言えないようである。^(注3)もっと注意されてもいい点が残されているように思われる。

濁点に関していえば、丸本の翻印の仕方如何によっては、語性の変わってくる場合のあることである。

例えば、「心中宵庚申」中之巻の「かるハどこに來てきかぬ」か、我ときせぬかうせぬかと、せハしくおるの気のいらたで、あいく、^(注4)愛に仕事しながら」(23ウ3)、下之巻の「女房ハ内外

のせわに五つも」年ふけて、朝からばん迄氣ハいらたで、此半兵衛ハ蔵にべらく何して」いやる、」(29オ6)の傍線部に見られる「いらたで」の部分^(注5)を、従来は「いらだて」と濁点の位置を変えて翻刻してきたようであるが、これはやはり「いらたで」ではないかと思われる。その傍証としてはいくつかあるが、「和訓栞」にこの語があがっていることである。しかし、出典が明記され^(注6)いず問題が残る。他に「近世上方語辞典」に、直接にはないが、この語について言及されているのが参考になる。

次に胡麻点に関していえば、漢字に訓み仮名が付されていない場合、胡麻点の付され方、あるいは胡麻点の数^(注7)が訓みを決定するのに役立つ場合のことである。

例えば、「出世景清」第一段目の「もくのかみしゆりのかみ、をのがし」なれる出立にて、吉方に打むかひまづやがための、さいもんをとな」へつゝ」(3ウ2)の「吉方」の「吉」の部分に胡麻点(上胡麻)が二つ付されている。従って、これは「エホウ」ではなく「キッポウ」とよむべきである。^(注8)

あるいは、「冥途の飛脚」下之巻の「ハアかなしやと忠兵衛もがけども」さハげ共、身をかへり見て出もやらず」(36才8)の「出」の部分に胡麻点が二つ(下胡麻と上胡麻付されていることにより、ハ「デ」もやらず√ではなくて、ハ「イデ」もやらず√である等。

しかも、下胡麻と上胡麻で、アクセントが○●型(○は低い音節、●は高い音節を示す)になり、きちんとあっている。これなどは、胡麻点の数もさることながら、それによって表わされるアクセントの面からも矛盾がなく、よみがより確実になる例であるといえよう。

しかしながら、胡麻点による表記は、漢字のよみを決定するのに役立つなどということよりも、むしろ、近世初期の京阪語のアクセントの実態を知る資料としての価値の方が大きいようである。今までも、浄瑠璃譜本に見られる胡麻点が、譜本当時のアクセントを反映しているのではないか等のことは、諸氏によっていろいろと言われてきたが、筆者の知る限りでは、いまだに十分な研究がなされていないようである。筆者も現在のこの方面の研究をすすめているが、その詳細については、いづれ発表したいと思っている。中でも所謂三拍名詞^{ウツギ}兎^{ウツギ}類その他のアクセント変化(○●●●↓○●●)の問題など興味深い結果が出そうである。

又、表記面全般についていえば、この方面の実態がまだ十分明らかになっていないとは言えず、まだ／＼解明されなければならない点が多く残されている。この方面については、池上楯造氏、山田俊雄氏、小松英雄氏をはじめとする方々の御研究があるが、それぞれに非常に示唆に富むものがあり、参照すべき点が多い。

諸資料における文字表記等の実態を明らかにし、それを積み重ねることによって、その基底をなすところの、表記意識・表記原理の

歴史(一種の言語生活史)が浮かびあがってくるのではないかと思われる。そういった観点に立って、今回は、濁点あるいは胡麻点による表記について、いささかの考察を加えてみたいと思う。その際には、やはり丸本を元にしての研究が必要である。というのは、語彙・語法等についての研究は活字本を利用しても可能であろうが、当面の問題に関しては、活字本は特に不向きであると思われるからである。

一、調査資料について

ここで取り上げる資料は、近松の世話物浄瑠璃二十四篇のうち二十篇である。祐田善雄氏作成の「近松年譜」により、初演順に並べた。

- (1) 薩摩歌、宝永元年(一七四四)、天理図書館蔵八行五十六丁本。
- (2) 心中二枚絵草紙、宝永三年、大東急記念文庫蔵八行三十三丁本。
- (3) 卯月紅葉、宝永三年、大東急記念文庫蔵八行三十三丁本。
- (4) 堀川波鼓、宝永四年、「近松名作集」上所収の複製、八行三十三丁本。
- (5) 五十年忌歌念仏、宝永四年、天理図書館蔵八行三十二丁本。
- (6) 卯月の潤色、宝永四年、大東急記念文庫蔵八行二十九丁本。
- (7) 心中重井筒、宝永四年、九大国語学国文学研究室蔵八行三十二丁本。
- (8) 丹波与作待夜の小室節、宝永五年、天理図書館蔵七行五十九丁本。
- (9) 淀鯉出世滝徳、宝永五年、天理図書館蔵七行五十二丁本。

(10) 心中刃水の朔日、宝永六年、天理図書館蔵八行三十一丁本。

(11) 心中万年草、宝永七年、大東急記念文庫蔵八行四十丁本。

(12) 冥途の飛脚、正徳元年(七二)、天理図書館蔵八行四十二丁本。

桜楓社刊の複製、七行五十四丁本を参照。

(13) 長町女腹切、正徳二年、祐田善雄先生記念会の複製、八行三十七丁本。

(14) 生玉心中、正徳五年、天理図書館蔵七行四十七丁本。

(15) 鍵の権三重帷子、享保二年(七七)、大東急記念文庫蔵七行四十九丁本。

(16) 山崎与次兵衛寿の門松、享保三年、九大国語学国文学研究室蔵七行四十三丁本。

(17) 博多小女郎波枕、享保三年、大東急記念文庫蔵七行四十丁本。

(18) 心中天の網島、享保五年、大東急記念文庫蔵七行四十二丁本。

(19) 女殺油地獄、享保六年、新興社刊の複製、七行五十丁本。

(20) 心中宵庚申、享保七年、九大国語学国文学研究室蔵七行四十七丁本。

なお、以上の作品から引用するにあたって、次のような略号を用いることがある。

(1)〔薩摩〕 (2)〔二枚〕 (3)〔紅葉〕 (4)〔堀川〕 (5)〔五十〕

(6)〔潤色〕 (7)〔重井〕 (8)〔丹波〕 (9)〔淀鯉〕 (10)〔刃水〕

(11)〔万年〕 (12)〔冥途〕 (13)〔長町〕 (14)〔生玉〕 (15)〔鍵〕

(16)〔山崎〕 (17)〔博多〕 (18)〔網島〕 (19)〔女殺〕 (20)〔庚申〕

また、引用の際には、印刷の都合上、現行の仮名字体・漢字にあためたが、仮名の「ハ・ミ」に関しては、元のまゝに存した。仮名遣等についても一切手を加えなかった。引用文中にあらわれる

(、)は句切符号、(―)は行がえのしるしである。なお、本稿の性質上、不濁点(、)を用いることがある。従って、それは、半濁点ではないことを予めお断りしておく。

ところで、以上とりあげた資料は、全て山本板、あるいはそれに準ずるものである。山本板以外の他の板を使用した場合には、又違つた結果が出るかもしれないが、ここでは、近松の諸作品が専ら山本を通じて板行されたという事情により、山本板をあくまでも優先した。

二、清濁表記について

濁点がきちんとふられない時代の話の清濁を決定するのは、なか／＼困難である。その決定の一方法として、当時の辞書類を利用するというやり方がある。しかし乍ら、拠る所の辞書が、清濁をきちんと書き分けているかどうかということになると、問題は更にむづかしくなってくる。

濁点がふられている場合(勿論、中には誤まってふられている場合もある)は、それでいいとしても、当然ふられていいと思われる部分にふられていない場合、いかに考えるかである。その場合、大きく分けて三つの考え方があろう。

先づその一は、濁点のふり方が厳密でないから、ふり忘れた、あるいは、ふられていない等と見る考えと、その二は、現在とは清濁の意識、あるいは、状態が違っていたとする考えである。その三は、何らかの事情によって、濁点の部分が板木から欠落したとする考えである。(こういう場合は、そう多くはないであろう)

しかし乍ら、如何に解釈するかは、非常にむづかしい。そこで、

別の方法を考えると、内部徴証によるやり方があろう。内部徴証からもある程度の傾向が出てくるのではないかと考えられ、用例より帰納してみるといいことになるろう。

次に、取り上げた資料において、濁点がいかに付されているかを見てみよう。

三、濁点の実態

およそ次のようなことがわかる。

- ①、漢字には普通ふられていない。
- ②、所謂清音の仮名には全くふられていない。
- ③、ガ・ザ・ダ行の仮名には普通ふられている。
- ④、バ行の仮名

③、バ行の仮名のうちで、「は・び・べ・ば」の仮名には普通ふられている。

④、所謂「む」に通う「ぶ」にはふられていないことが多い。

以上のことについて次にのべる。

〔Aの一〕

漢字には、普通ふられていないが、いくつか漢字にふった例が見られる。中でも「堀川」にその用例の大半がしめられているのが注意される。^(注20)

「ぬすべハ外にあらん心をしづめて御せんさくと。」

〔二枚・21オ3〕

「細引の」ゆふて思ひやはらすらん、」

〔堀川・2オ5〕

「御門がしまるとよバ、れバ」

〔〃・7オ1〕

「よし御せうゐんなきからハこなたと爰で」さしちがへ、」

〔〃・8ウ4〕

「あれよくといふこゑに、文六下女共かけ付て」

〔〃・15ウ5〕

「とうふあきなふ商人の」きらすくと声だかに」

〔〃・23ウ5〕

「へうたん町をこしづけにいけん」ふる手のいんらうの」

〔淀鯉・1ウ2〕

「そちが商売ハ三度ではないか、」

〔冥途・8オ4〕

「十七軒の飛脚問屋あるひ」ハ順礼ふる手かひ、せき候にばけて家々をのぞきのから」くり」

〔〃・32オ3〕

〔Aの二〕

所謂清音の仮名には全くふられていないのは言うまでもないことであるが、次のようなことは注意していいことである。

次にあげるいくつかの語は、表記が常に一定している。(以下その用例の一部をあげる。)

〔あだ(仇)〕

「早ふくとわかれ行あだを御をんの情人、」

〔薩摩・43ウ4〕

「はうばいのきげん取、ついしやうしたが身のあだとなつた」

〔五十・16ウ4〕

〔おりがみ(折紙)〕

「諸役御免の受領聴、折紙太刀の御用迄」〔長町・1才8〕
しよやく めん じゅうろうしよく おりがこ

「代物とへ」ば三百貫の折紙」〔〃・12ウ6〕
おりがこ

〔ひょう(秘蔵)〕

「おやごぜが殿さまの御ひざうのおたかをそらし」

〔刃氷・5ウ8〕

「わしひとりひざう」子でうみにも山にもたとへられぬ」

〔〃・30ウ8〕

「羽織の下より一升入のひざうのひやうたん取出し、」
はおり

〔生玉・34ウ2〕

「親のひざう」が手をへて、廻り来るもふしきなり」

〔長町・12才1〕

以上あげた語が表記通りによまれたとはなか／＼言えないが、少なくとも、何度か出てくる表記が常に一定しているということは注目していいことではないだろうか。

他の「語り物」、例えば平曲などでは、譜本にいろ／＼な注記があり、その解釈をめぐっては問題があるようであるが、丸本には、平曲譜本に見られるような「スム」等の積極的な注記がないにもかかわらず、常に表記が一定しているということは、あるいは、丸本当時の発音の状態を反映していると考えてもいいのではないかと思われる。しかし乍ら、このことについては、いくつかさういいきれない問題もあるので後考にまちたい。

〔⑧の1〕

ガ・ザ・ダ行の仮名には普通ふられている。

「気がつかなんだ蚊がくハふ蚊」屋へおじやとだきいる、」
〔薩摩・12ウ5〜6〕

〔⑧の2〕

⑧バ行の仮名の中で「ば・び・べ・ぼ」には普通ふられている。

「ふんどうなりの一対ハびせんの間」山、」〔薩摩・7ウ6〕

「あらましかくとのへければ」ミすの内そと」さハ／＼」

〔薩摩・8ウ7〕

「おもハくの、」はりのもとすゑおぼえそめ、」

〔〃・31才4〕

〔⑧の1〕

バ行の仮名の「ぶ」のうちで、元々の「ぶ」には普通ふられている。

「木々のこすゑもしげ蔵とたがよぶこどりぎつり取、」

〔薩摩・1才5〕

「命」なたねにあぶらのなみだ」

〔〃・5ウ3〕

〔⑧の2〕

所謂「む」に通う「ぶ」にはふられていないことが多い、ということに関してはいくつか問題がでてくる。

それは、次のようなことが言われているからである。

「近松浄瑠璃丸本における「けおり」「さぶらひ」等の「ふ」の仮名は、「む」によむべきである。」と。

しかしながら、この考えに対して疑いをはさむ向きもないわけ

はない。この考えは、日本古典文学大系『近松浄瑠璃集』下巻において、近松の時代物浄瑠璃に見られる「ふ」「へ」の仮名の特殊な読み方について、当時の仮名遣書、辞書等でもってたしかめられたのであるが、もしそのようなことがいえるならば、それは、自ずと世話物にもあてはまっていと思われれる。

先にあげた二十篇の資料について、当面の問題の実態をまとめたものが次にあげるものである。

なお、作業にあたっては、語頭を除く語中尾の「ぶ」の仮名を含む全ての語を抜き出すと同時に、それらの語が他の表記（「ぶ」「む」）を取っているか否かに留意し、所謂「ぶ」「む」通い合うと思われるものを選んだものが次の18語である。さしあたり「ぶ」表記でもってかかしておく。

①あぶなし(危し) ⑦かうぶり(蒙り) ⑬さぶらひ(侍)
 ②うかぶ(浮かぶ) ⑧かぶり(頭) ⑭たつとぶ(尊ぶ)
 ③うそぶく(嘯く) ⑨かぶろ(禿) ⑮たはぶれ(戯れ)
 ④うつぶく(俯く) ⑩けぶり(煙) ⑯つぶり(頭)
 ⑤かたぶく(傾く) ⑪こぶら(豚) ⑰とぶらひ(巾ひ)
 ⑥かぶり(被・冠り) ⑱さぶし(寒し) ⑲ねぶり(眠り)

語の配列にあたっては、アイウエオ順にし、「ぶ」「ぶ」「む」の表記の順に、a、b、c、の符号を付した。また語の掲載にあたっては、語尾に問題のある語を除き、普通連用形の形で出した。また、自動詞・他動詞の区別のある④の「うつぶく」や⑤の「かたぶく」その他③の「うそぶく」や形容詞などは終止形の形で出した。なお、語の下にあげる数字は用例数である。用例がない時は、これをあげず。また、一部の作品（冥途）でもって、他の板の実例を

示した。

以下、作品別にその実態を示す。(なお、後尾に一覧表を付しておく)

		(1)〔薩摩〕		
		① a あぶなし		1
		② b うかぶ		2
		④ c うつむく		1
		⑧ a かぶり		1
		⑨ a かぶろ		2
		⑩ b けぶり		1
		⑪ a こぶら		1
		⑬ b さぶらひ		3
		⑮ b たはぶれ		1
		⑰ b とぶらひ		3
		⑱ c ねぶり		6
		c ねむり		1
	(2)〔二枚〕			
		⑤ b かたぶく		1
		⑩ b けぶり		3
		⑫ c さむし		2
	(3)〔紅葉〕			
		④ b うつぶく		2
		⑩ b けぶり		2
	(4)〔堀川〕			
		④ b うつぶく		1
		c うつむく		1
		⑤ a かたぶく		1
		⑨ b かぶろ		1
		⑬ b さぶらひ		1
		⑮ b たはぶれ		1
		⑰ a つぶり		1
		c つむり		1
	(5)〔五十〕			
		③ b うそぶく		1
		⑤ b かたぶく		1
		⑥ a かぶり		1
		⑧ a かぶろ		1
		⑩ b けぶり		3
		⑮ b たはぶれ		2
		⑰ b とぶらひ		3
		⑱ b ねぶり		1

- ⑭ bとぶらひ
cとむらひ
⑮ bねぶり

(17) 〔博多〕

- ① aあぶなし
② aかたぶく
③ aかぶり
bかぶり
④ aかぶろ
⑤ aかぶらひ
cねむり

(18) 〔網島〕

- ④ bうつぶく
cうつむく
⑤ aかたぶく
⑥ aかぶり
③ aかぶり
⑩ (水)けぶり
⑫ cさむし
⑬ cねむり

(19) 〔女殺〕

- ④ aうつぶく
⑤ bかたぶく
⑦ bかうぶり
⑨ aかぶろ
⑩ bけぶり
⑫ cさむし
⑮ bたはぶれ
⑰ bとぶらひ
⑱ bねぶり
cねむり

(20) 〔庚申〕

- ① aあぶなし
④ cうつむく
⑥ aかぶり
⑩ bけぶり
⑰ cとむらひ
⑱ aねぶり
cねむり

以上の実態より、いろいろのことが明らかになってくるが、その主なものは、次のようなものである。
決して全ての語に関して「ぶ」「ぶ」「む」の三つの形があらわ

れるものではないこと。各種の組み合わせがあること。作品によって表記の傾向が一定しているものがあること等。次に分析を加えてみる。

四

語の面についていうと、大きく六つに分けられるようである。

- 一、aのみのもの 二、bのみのもの 三、cのみのもの
四、aとbのもの 五、bとcのもの 六、a b cのもの

一には⑧の「かぶり」⑩の「こぶら」がある。

(これに準ずるものとしては、①の「あぶなし」⑨の「かぶろ」などがあられる。)

二には③の「うそぶく」⑦の「かうぶり」⑩の「けぶり」⑬の「たはぶれ」がある。

(これに準ずるものとしては、⑭の「さぶらひ」がある。)

三には、⑫の「さむし」がある。但し、これは、「冥途」の七行本の用例を採用した場合であるが、注意される。

四には、①の「あぶなし」⑨の「かぶろ」がある。

五には、②の「うかぶ(む)」⑬の「さぶ(む)し」⑮の「さぶ(む)らひ」⑱の「たつとぶ(む)」⑰の「とぶ(む)らひ」があり、これに準ずるものとしては、⑭の「ねぶ(む)り」がある。

六につていは、④の「うつぶく」⑤の「かたぶく」⑥の「かぶり」⑬の「つぶり」⑱の「ねぶり」がある。

語の表記が一定していることについての解釈は、非常にむづかしい。殊に、全作品を通じて表記の一定しているものがいくつか見られることは注目すべきことである。その中でも「ぶ」表記のもの

解釈については、語の表記の伝統性のゆえか等いろいろと考えられるが、なお検討を要するところである。

次に、一つの語が二つの表記をとっているもののうちで、「ぶ」「ぶ」表記のものが、①の「あぶなし」⑨の「かぶろ」の二語であり、これらの「ぶ」表記が、それぞれ一語ずつであることは注意していいことである。これは、「けぶり」等の「ぶ」表記が単に「ぶ」の濁点無表記でないことの一証ともなるのではないかと思われる。

次に、「ぶ」「む」表記をとる語の用例数を検討してみると、大きく二つに分かれるようである。(一)内用例数。上段「ぶ」下段「む」表記。

「ぶ」表記が優勢なものは、⑬の「さぶらひ」(20/1) ⑭の「とぶらひ」(14/4)の二語。「む」表記が優勢なものは、⑫の「さむし」(2/14) ⑯の「うかむ」(2/3)の二語である。(⑭)の「たつとぶ」については、用例が少ないため除外する。(一)このことについては、あるいは、当時の音韻状態の反映かとも考えられるが、なお後考にまきたい。

次に、一つの語が同一作品中でもって二つの表記をとっていることも注意される。「堀川」「鐘」「網島」に見られる④の「うつぶく」、「長町」に見られる⑤の「かたぶく」、「堀川」に見られる⑯の「つぶり」、「山崎」に見られる⑱の「とぶらひ」(而もこれは同一文中であることが注意される。)(「薩摩」「女殺」に見られる⑳の「ねぶり」、同じく「鐘」でも「ねぶり」が見られる。

作品内部の表記面については、次の四つに分けられる。

- 一、bのみのもの 二、aとbのもの 三、bとcのもの 四、abcのもの

一には、(3)の「紅葉」があり、これに準ずるものとしては、(2)の「二枚」(10)の「刃水」(12)の「冥途」がある。

二には、(5)の「五十」(12)の「冥途」(10)の「博多」、これに準ずるものとしては、(7)の「重井」(9)の「淀鯉」(11)の「万年」(13)の「長町」がある。

三には(2)の「二枚」(6)の「潤色」(14)の「生玉」、四には、(1)の「薩摩」(4)の「堀川」(7)の「重井」(8)の「丹波」(9)の「淀鯉」(11)の「万年」(13)の「長町」(15)の「鐘」(16)の「山崎」(18)の「網島」(19)の「女殺」(20)の「庚申」がある。

とにかく「ぶ」表記のみのものが、二作品もあることは、注目すべきことである。以上のように、四つの段階があることについては、いろ／＼と解釈できようが、一つの解釈として、板下書きの仕事の仕方如何が反映したものと考えることができよう。

特に「ぶ」表記については、濁点をふるという労働の負担減ということが考えられるかもしれないが、その場合、何故「む」に通わない「ぶ」に濁点がふられているかの理由づけがなく矛盾してくることになる。ある一群のものに、ふらないという方針でもって、それを、一つ一つ見究めることの方が、はるかに負担増だと思われるからである。

ということになると、他の理由を考えないといけないことになる。

ここで思いおこされるのは、作業の結果明らかになったことの中で、語が二つの表記をとる場合は、大抵「ぶ」「む」であったことである。従って、「ぶ」表記は単に「ぶ」の濁点無表記ではないということがいえよう。

これは、初めから、よみは「ぶ」でも「む」でもよかったということであろう。これらに関しては、どちらのよみをも許していたのであらうと思われる。

もし、どちらか一つによみを固定するならば、はじめから「ぶ」あるいは「む」とかくべきである。ところが、そうはなっていない。「む」と通わない「ぶ」には濁点の落ちている例が少ないということとは、やはり「む」に通う「ぶ」のうちで濁点のふられていない「ぶ」には何らかの意図があったということになる。そのことについては、先にのべた通りである。

丸本が「語り物」のテキストとしても使われたという事情を考慮してみるならば、「む」とよませることを意図しているものが、わざわざ「ぶ」とかいたりするなどということがあろうか。そういうこととはないのである。

「む」あるいは「ぶ」とかいてしまうと、どちらか一方にしかよまれないことになる。つまり、よみが固定してしまうことになる。それよりも一つの表記でもって二通りによませるためには「ぶ」とかいて、濁点をふらないか、あるいは、「む」とかいて濁点をふるかの二通りしかない。そこで、どちらが一般的であったかということ、それは前者の方がそうであったから、それに従ったまでのことであって、そもそも、どちらか一方によみを固定しようとする事自体がむりなのである。

では、何故に、このようなやり方をとったのであろうか。これらうまく説明するのは非常にむづかしいことであるが、一応次のように考えていいのではないかと思う。

つまり、このやり方は、丸本のかなりの部分が、仮名でかかれて

いることについて、今尾哲也氏の言われた「一つの言葉に、いくえにも映像をかきねてゆく修辭上の問題が、漢字による言葉の狭隘な限定を許さず、仮名書きの広範な使用を必要としたのであった。」という、この考えと発想を同じくするものではないだろうかかと筆者は考えている。

しかしながら、仮名書きの使用については、プラスの面だけでなく、マイナスの面も出てくるであろう。例えば、同音異義語の問題等。このマイナスの面を補うものが、胡麻点ではないかと思われる。そういう意味では、仮名書きの使用と、胡麻点の使用とは、あるいは、表裏一体の関係をなすものではないだろうか。

おわりに

以上、濁点による表記の実態を見てきたのであるが、一応、きちんと、正確に付られている傾向が見てとれたと思う。それでは、一体、ここに見られる表記は、だれの手になるものであろうか。そのことについては、にわかには断じ難いが、それらは、他の表記面、仮名遣等を精細に見ていくことによって、表記意識・表記原理とともに明らかにになってくるのではないかと思われる。それらを通してもう一度考えてみたいと思っている。

紙数の関係上、胡麻点について殆んどふれることが出来なかったが、「はじめに」の部分に述べたように、この方面のことは、もっともっと注意されていいものである。筆者は「近松浄瑠璃の国語学的研究」を目指しているものであるが、まだ緒についたばかりで、不明な点が多い。早く佐藤鶴吉氏の御研究があるが、まだ十分には言いつくされたとも思われず、当面の胡麻点の問題については今

まで注意が向けられていなかったといえる。この問題については、いずれ近日中に稿をあらためたいと思っている。多方の御叱正を乞うものである。

〔付記〕

なお、本稿をなすにあたっては、直接間接にわたって数多くの方々の御援助、御教示をたまわった。御名前はしるさないが、各位に対して感謝申し上げる次第である。

特に資料の面では、天理図書館に格別の御高配を賜わったことをあつく感謝するものである。

注

- (1) 国語学会篇(昭五十一年)武蔵野書院刊、浄瑠璃の項の解説は坂梨隆三氏。
- (2) 丸本の書誌的な面については、次のものを参照。
横山正氏「浄瑠璃芝居の研究」
祐田善雄氏「浄瑠璃七行本の研究」『浄瑠璃史論考』所収。
「近松浄瑠璃本奥書集成」大阪府文芸懇話会編。
(3) 日本古典文学大系「風来山人集」所収の「神堂矢口渡」の節章解説(祐田善雄氏)等参照。
(4) 近松全集(朝日新聞社刊)以来、清濁、あるいはよみくせのようなものについては注意されてきたが、最近の日本古典文学大系「近松浄瑠璃集」下巻、小学館日本古典全集「近松門左衛門集」(一)では、非常に注意されている。しかし、見おとされている面もあるようである。
例えば「冥途」(38ウ7)の「つちにどうどひ」れふしてこをを、ばかりに泣ければ「のばかり」を濁点を付して「ばかり」と翻刻しているものが多いが、用例を帰納した限りでは、全て濁点が付されていない。なお、以下、具体的に引用する場合は、特に断らない限り、「(一)」にあげる調査資料を使用。現在、丸本に忠実に「いらたで」と翻印しているのは、角川文庫「近松世話物集」(一)(諏訪春雄校注)のみである。
(5) しかし、これも、あやまりとみとめてか、横に「いらだて」と訂正している。

- (6) 『増補語林・和訓栞』上巻 236p「いらたで 辛鬱をいふ〇俗に気のいらたつをいらたでのやうなといへり」前田勇編、115pに享保九年・頼政追善芝四「ア、兩人はなぜ遅いと、尻もすはらず立つつ老人の気ぞいらたでなる」の例をあげ、濁点が「て」にある例も多いが「た」にあるべきか。とある。
- (8) 新典社刊の複製本(七行五十四丁)による。
このことについては、早く、日本古典文学大系「近松浄瑠璃集」下巻の頭注でふれられている。
- (9) 金田一春彦氏、「邦楽の歌詞と旋律のアクセント」『東亜音楽論叢』所収、近石泰秋氏「浄瑠璃の研究・続編」III p
奥村三雄先生、「平曲譜本に反映したアクセント」(国語と国文学昭和四十五年十月号)同、講座国語史2「音韻史・文字史」所収「古代の音韻」等参照。
池上祐造氏「文字論のために」(『国語学』23輯)同、「文字論の位置」『国語学』15の3・4号)
- (10) 山田俊雄氏、講座国語史2「音韻史・文字史」所収の「近代・現代の文字」等。
小松英雄氏「仮名文の表記原理」(国文学漢文学論叢19輯)、「藤原定家の文字づかい」(言語生活初号)
- (11) その他、シンポジウム日本語④「日本語の文字」
『浄瑠璃史論考』所収。
雄松堂刊の近世文学資料総覧所収マイクロフィルムによる。
- (12) 「以下大東急のものは全てこれによる」
(13) 一部、奥書のないものがあるが、小学館日本古典全集「近松門左衛門集」(一)に掲げである資料によって同板なることを確認。
(14) ひしる当然のことかもしれない。
(15) 注(2)参照。
(16) 「山崎」^{ちよ}「千代」^{ちよ}根引「たへすまじ」、「(1オ7)は「たへすまじ」の誤まり。しかし、このような例は少なく、概ね、正確にふられている。
(17) 漢字に濁点をふっている例については、あまり多くを知らないが、京大本平曲正節・井原西鶴「好色二代男」等に例があるようである。
(18) これは「堀川」の性格が他のものと異なるものではないかと思わせる一例である。他に助詞の「を」を「お」で示す、あるいは、語頭に「ハ」を使い「わ」とよませる等、仮名遣の誤まりの面でも特異性がみられる。
(19) 京大本平曲正節の解説(奥村三雄先生) 33p参照。その他、大空堂書店刊行の尾崎家本「平家正節の内容見本における奥村三雄先生の解説等参照。

㉒ 平曲、文明本館用集等の読みと一致するという点、いかに解すべきか。

㉓ 日本古典文学大系「近松浄瑠璃集」下巻解説。

㉔ 小学館日本古典全集「近松門左衛門集」(一)の凡例。その他、日本古典文学大系「仮名草子」の補注仍p等

㉕ (山崎) (23ウ) には「神仏とていふ」とあり、印をつけた「と」は「と」の誤りと思われる。別本、富松藤摩揀七行44丁本により訂正。

㉖ この方面の研究としては、松本宙氏「マ行音バ行音交替現象の傾向」(国語学研究所5)同、「キリシタローマ字資料におけるマ行バ行交替現象の実態」(文学研究42)等がある。

㉗ 前記大系の解説では、「ぶ」とかいて「む」とよむことの典拠を仮名遣書に求めているのであるが、思うに仮名遣書というものは、人々に正しい(㉔)仮名遣の意識がない、あるいは、仮名遣が乱れているために、それを正そうとして作られるものであるから、前記の典拠にそれをもつてくるのはいかながなものであろうか。

むしろ、それらの仮名遣書というものは、どちらか一方のよみがなされたというのではなくて、かえて二通りのよみが行なわれていたということの証拠になるであろう。「片言」などに見られるものはまさにそれである。

㉘ 「注釈の原点」(文学昭和四十五年四月号。)

㉙ 岩波講座日本文学所収「近松浄瑠璃の国語学的研究」

受贈雑誌 (昭和五十一年六月〜昭和五十二年四月) ②

語文論叢 (千葉大人文) 4 / 滋賀大國文 14 / 実践国文学 10 / 淑徳国文学 18 / 樟蔭国文学 14 / 抄物研究 (小林国語研) 2 / 抄物の研究 (愛

媛抄物研) 3 / 女子大國文 (京都女子大学) 79 80 / 人文科学 (同志社大学人文科研) 2 卷 4 / 人文学報 (都立大学) 117 / 千葉大國文研究 5 / 人文研究 (神奈川大) 64 65 / 清泉女子大國文紀要 24 / 成蹊大國文学部紀要 12 / 青踏女子短期大学紀要 6 / 東京女子大学日本文学 43 44 45 / 専修国文 20 / 高崎経済大学論集 19 卷 1 2 3 / 玉藻 (フェリス学院大学) 12 / 中世文学研究 (中四国中世文学研) 2 / 中世文学論叢 (東京学芸大中世文学研) 1 / 同志社国文学 12 / 東洋学研究所 (東洋大学東洋学研) 10 / 東洋大学大学院紀要 12 / 都立大学方言学会会報 70 71 72 / 都大論究 (都立大学) 12 / 富山大学国語教育 1 / 富山大学教育学部紀要 24 (分冊) / 名古屋大学国語国文学 38 39 / 並木の里 12 / 南山国文論集 1 / 新潟大学国文学会誌 20 / 日本学術会議月報 17 卷 5 6 7 8 9 10 11 12 / 18 卷 1 2 / 日本古典文学会々報 45 / 日本文学研究 (高知日本文学研) 14 / 日本文学研究 (大東文化大学) 16 / 能研究と評論 (月曜会) 6 / 白路 31 卷 7 8 9 10 11 12 / 32 卷 1 2 3 / 植生野国文 (四天王寺女子大学) 7 / ビブリア 63 64 65 / 福島大学教育学部論集 27 の 2 / 藤女子大学国文学雑誌 19 20 / 文化 (東北大学文学会) 40 卷 1 2 / 文学史研究 4 / 文学年誌 (文学批評の会) 2 / 文学論藻 (東洋大学文学紀要) 51 / 鹿児島大学文科報告 12 / 文教国文学 (広島文教女子大学) 5 / 文芸研究 (東北大) 82 83 / 文芸と批評 4 卷 6 7 / 文芸論叢 (大谷大学) 7 / 文芸論叢 (立正女子大学短大部) 12 / 文莫 (鈴木腹学会) 1 / 別府大学国語国文学 18 / 方言研究年報 (広島方言研究所) 続 1 / 万葉 92 93 / 美夫君志 19 20 / 武庫川国文 10 11 / 明治大学日本文学 7 / 野州国文学 (国学院大学栃木短期大学) 17 18 / 山辺道 (天理大学) 20 / 立命館文学 367 / 文学研究 (九大) 74 / 国語学 105 106 107 108 /

語例	作品名																				計	備考
	(1)薩摩	(2)二枚	(3)紅葉	(4)堀川	(5)五十	(6)潤色	(7)重井	(8)丹波	(9)淀鯉	(10)刃水	(11)万年	(12)冥途	(13)長町	(14)生玉	(15)鐘	(16)山崎	(17)博多	(18)網島	(19)女殺	(20)庚申		
1 a あおなし(危し)	1						2	1		2		1		2		2			1	12	※(12)冥途の()は同じ山本板の七行本である。	
b あおなし															1					1		
2 b うかぶ(浮かぶ)	2																				2	
c うかむ						2								1							3	
3 b うそぶく(嘘く)					1																1	
4 a うつぶく(俯く)							1									1			1		3	
b うつぶく			2	1		1				1			1		1			1			8	
c うつむく	1			1			1						2	1	1			1		2	10	
5 a かたぶく(傾く)				1													1	1			3	
b かたぶく		1			1		1	1		1	1		1	1					1		9	
c かたむく													1								1	
6 a かぶり(被り・冠り)					1		1	1	2		1		2			2	1	1		1	13	
b かぶり																	1				1	
c かむり															1						1	
7 b かうぶり(蒙り)								1											1		2	
8 a かぶり(頭)	1				1										2	2		1			7	
9 a かぶろ(禿)	2								3			5(5)				4	1		1		16	
b かぶろ				1																	1	
10 b けぶり(煙)	1	3	2		3	1	1	1	1	1	1	1(1)		1	2	1		1	3	2	26	
11 a こぶら(豚)	1							1													2	
12 b さぶし(寒し)												2									2	
c さむし		2					2	1	2			(2)			1		3	1			14	(2)を含む。
13 b さぶらひ(侍)	3			1				3		7		1(0)	2	1	3						21	(0)は漢字になったためである。
c さむらひ															1						1	
14 b たっとぶ(尊ぶ)																1					1	
c たっとむ											1										1	
15 b たはぶれ(戯れ)	1		1	1	2	1	1								1				1		9	
16 a つぶり(頭)				1																	1	
b つぶり												1(1)									1	
c つむり				1																	1	
17 b とぶらひ(巾ひ)	3				3	2		1			1					1	1		2		14	
c とむらひ																1				3	4	
18 a ねぶり(眠り)															1					1	2	
b ねぶり	6				1	1			2		2	2(1)			1	1			1		16	
c ねむり	1							1		1				1				1	2	1	8	